

Methods of Social Study

社会調査の方法

S・ウェッブ B・ウェッブ 川喜多喬訳

東京大学出版会



Methods of Social Study

社会調査の方法

S・ウェッブ B・ウェッブ 川喜多 喬 訳

東京大学出版会

訳者略歴

1948年 大阪府に生まれる。

1971年 東京大学文学部卒業。

現在 茨城大学人文学部助教授。

主要論文・訳書

「ベアトリス・ウェッブと『社会実験』の実証的社会科学」(『茨城大学人文学部紀要(社会科学)』1979年)

「『福祉政府』と社会科学の課題」(『経済評論』1979年5月号)

「地場産業と就業機会」(『経済評論』1981年3月号)

E. デュルケム「社会学講義」(共訳, 1974年, みすず書房)

E. デュルケム「モンテスキューとルソー」(共訳, 1975年, 法政大学出版局)

社会調査の方法

1982年3月20日 初版

[検印廃止]

訳者 かわきた たかし
川喜多 喬◎

発行所 財団法人 東京大学出版会

代表者 江村 稔

113 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話 (811) 8814・振替東京 6-59964

印刷所 大日本法令印刷株式会社
製本所 誠製本株式会社

3036-52061-5149

訳者はしがき

本書は、イギリスのフェビアン社会主義の優れた指導者であり、また労働組合運動、消費者協同組合、地方統治機構ならびに自治行政、社会保障ならびに失業救済制度その他について膨大な実証研究を残し、かつ理論家としてイギリスのみならず諸外国の社会改良の実際に大きな貢献をしたウェッブ夫妻の『社会調査の方法』（一九三二年）の全訳である。

専門的な研究者ならば、ウェッブ夫妻が生涯をかけて多くの人に会い、多数の地域を訪れ、無数の文献と同時代文献を読みあさり、さまざまな制度・機構が運営されている様子を現場観察するという多様な実証的研究手法を駆使し、何万枚もの記録ノートを基として調査を思想に結実させたことを知っている。しかしながらわが国への社会主義思想史の紹介が、とくに最近マルクス主義に偏って行われているため、フェビアン社会主義者の業績が、思想ないし理論としてのみマルクス主義のそれとの純理論内在的な対比で語られるという類の概論書が多く、多くの初学者にはウェッブ夫妻からわれわれが学ぶべきことがその多様な実証的方法にもあることが知られていない。

しかしながら本書の翻訳は、たんにウェッブ夫妻の方法についての歴史的興味に依るものではない。

今日、社会科学の方法に関するものに眼を通せば、極端に言えば次の二通りのものが多いように思われる。一方はドイツ哲学系のもので、難解至極な認識論、いわゆる「方法論」に満ちており、深刻で生真面目な議論の筋がおぼろげにわかっていても、いざ現実の社会についての理解を深めてくれるかとなると、むしろそれからの隠退と書斎の安楽椅子とを勧める類のものである。他方は、アメリカ行動科学系のもので、「方法論」よりも「技法」に片寄っており、ノウ・ハウとして気軽に使え、さらには統計にかんするコンピュータ操作のテクニクまで教えてくれるが、実際の社会研究にあたってこれらの技法が使える段階は限られているのであって、初学者にこのタイプの方法を教えるとか何に使えるのか分らずに退屈してしまうか、とにかく何にでも応用してみろという軽薄に陥ることが多い。

ウェッブ夫妻のこの著書は、その点きわめてバランスのとれた方法論であり、とくに今、生きて動いている社会を研究しようとする初学者が、ほとんど何の準備もすることなく読み通して感銘を受けることができよう。一九三二年に書かれたものであり、晩年の夫妻がその生涯を反省しつつ記したものである。具体例として挙げられているものに多くの読者はなじみがないであろうが、意図されているところを読みとるのに苦労はないはずである。たまたま、本年は原著が世に問われてから五〇年目にあたる。社会調査を志す人びとの熟読、活用をお願いしたい。

本書を、ただ今書かれたものとしても十分「社会調査の方法」として通ずるものとして、出版を勧め、かつ逐語、原文と対照して読みやすくするために助言をいただいたのは、東京大学出版会の佐藤修氏からである。またウェッブ夫妻についての若き研究学徒であり、私にとって労働調査の良きパ-

トナーである雇用職業総合研究所の佐藤博樹氏にも一方ならぬお世話になった。日本の労働調査に多大な業績を残された氏原正治郎先生には本訳書の推薦を快くひき受けていただいた。とくに記して謝しておきたいとともに、本訳書を今年、めでたく還暦を迎えられて東京大学を退官されることとなった松島静雄先生に捧げたいと思う。

一九八二年三月一日

訳者

序 文

この小著は、私ども二人が次々と携わってきた英国の労働組合運動、消費者協同組合、地方統治機構の研究で用いた研究方法を詳しく書きとめたものにすぎません。たしかに私どもは、本書の第一章と最終章で社会の科学の展望と、またその避けることのできない限界を定義しようしました。しかし、これら二つの章も、方法論を議論したものと自負はしておりませんし、まして諸科学を分類する上で社会科学ないし社会学が占める位置を議論したと称するものではありません。この本で説明されているのは、単に特定の種類の社会制度の成長から変形、没落、ときには消滅までをとりあつかう社会学という学問分野を理解するためにわれわれが用いた接近方法です。したがって読者は、政治学と倫理との関係にかんする議論や、あるいは一方における自由に競争する富の生産者たちの金銭的利己欲と、他方における利潤を追求する資本家とプロレタリア賃金稼得者の階級闘争といった、特定の人間動機の普遍性ないし優越性にかんする理論的な仮定あるいは推定から論理的な演繹によって展開する「純粹の」経済学が有効でありうるか否かということは、この本の中に求めえないのです。また、われわれが関心を集中した学問分野においては、能力の不足ゆえ統計的手法を用いることができません。

んでしたし、またおそらくこの手法の適切な評価をすることもできませんでした。われわれの専門は、現に活動している組織に個人として参加したり、つぶさに観察したり、他の人びとからの証言を集めたり、検分可能なあらゆる資料を熟読吟味したり、また一般の文献を参照したりして、観察と分析によってある一国における特定の種類の社会制度を比較研究することになりました。学者や研究者がこの本を読んで益とされることがあれば、それでわれわれの目的は達せられたといえます。ここに書かれている以上の説明を求めたいと思われる方があれば、われわれの一方あるいは両方に御連絡下さい。

一九三二年九月

英国〔ハンプシャー州〕ハント市リップフック街バスフィールド・コーナーにて

シドニー・ウェツプ

ベアトリス・ウェツプ

凡 例

一、本書は、Sidney & Beatrice Webb, *Methods of Social Study*, London: Longmans, Green & Co., 1932 の全訳である。ただし、訳出にあたっては原書のままのプリント版 (New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1968) を用いた。

一、原書のイタリックの箇所は、強調を示す場合は傍点 (・・・) で、書名を示す場合は『』で表現した。

一、原書の " " は「」で表現した。

一、(1)(2)(3) … などの数字は原注であり、その内容は各章末にまとめた。

一、(a)(b)(c) … などは訳注であり、その内容は巻末にまとめた。なお、短い訳注は、本文中に「」で挿入した。

目次

訳者はしがき

序文

第一章 社会学の領域 1

社会学の主題 2

社会学のとりあつかう事実 13

社会事実の分類 16

動物的本能から生じる社会制度 17

宗教的情熱から生じる社会制度 19

人間主義的理想から生じる社会制度 20

社会的な目的を効率的に実現するための熟慮された計画から生じる社会制度 21

第二章 社会研究者の精神的資質 31

訓練された注意の必要性 32

答を求めて疑問から出発する誤り

35

事実の客観的研究 40

偏向の不可避性 43

共感的理解の必要性 45

予備教育 47

第三章 社会的事実の研究法 53

分類 55

仮説の効用 58

質問表の誤用 64

第四章 ノートのとりかた 81

第五章 書かれた言葉 95

記録と同時代文献との区別 96

記録の効用 99

記録のサンプリング法 103

同時代文献の効用 108

第六章 話された言葉 125

第七章 研究者の情報源としての政府の審議会および委員会 137

第八章 制度の運営の現場観察 151

一般的な印象の記録 176

第九章 統計の効用 191

第十章 検 証 205

実験の効用 206

証拠の集成 212

第十一章 公 表 219

第十二章 科学と人生の目的との関係 225

訳 注 243

解 説 253

第一章 社会学の領域

この本が化学の研究法にかんする本であつたならば、化学という科学の領域についての序章から出発する必要はなかつたであらう。しかし、化学とは違って、社会科学ないし社会学(1)は、他の知識部門からはっきりと分化してはいない。またその範囲について多くの人びとの一致した理解が得られているわけでもない。社会科学の正確な領域を漠然と不確かにしか知っていても、われわれの生活を取りまいてゐる多様な社会制度の構成と機能について市民が知っておかなければならぬことをすべて学習するのに何ら支障はきたさない。しかし、社会科学の世界で新しい発見をしようとするならば、つまり社会科学の領域で知識の地平線を拡げようとするならば、またさらに手許にある調査・研究の用具をもつとも効果的に利用しようと思うならば、自分たちの注意や関心を集中すべき科学の領域について当初からはっきりとした見解をもっておくことが大切なのである。

いかなる定義のしかたをするにせよ、およそ科学とは宇宙ないしその一部についての知識を意味する。社会科学ないし社会学にたずさわろうとする人びとは、宇宙の特定部分についての知識、すなわ

ち世界中に存在している多様な人間集団グループについての知識を求めているのである。実際、人類社会は、家族から国、さらに国際規模の国家連盟にいたる、また大学の弁論部からローマ・カトリック教会にいたる、あるいは村人のために鋳物をつくる鍛冶屋からゆるやかな連合体をつくっている世界の銀行家群と結託して活躍する国際鉄鋼カルテルにいたる、さまざまな人間集団から成り立っている(2)。

したがって社会学は、天文学、機械工学、物理学、化学を含む自然科学のグループとは区別される。そして生物学、動物学、生理学、心理学とともに生物科学のグループとも呼びうる一群に属している。後にみるようにこれら二群の科学〔自然科学と生物科学〕を区別しておくことが、それらの研究、発見、検証の諸方法、諸用具を考察するにあたってきわめて重要である。

社会学の主題

生理学や心理学と同様に社会学も人間をとりあつかわなければならない。ところが社会学は生理学や心理学と違って、身体と精神とをもった生きた有機体としての個々人に関心をもつのではない。人間たち相互の関係に関心をもつのである。この関係は(お国言葉や家族にみられるように)もつとも初歩的な人間社会の形式の中にもみられ、そしてさまざまな水準に発達をとげる。したがって人間関係の研究は、お互いに数限りなく多様な結びつきをもつ諸個人の行動の観察を含む。人間集団の形成とその絶え間なき変化に何かしらの役割をはたしているかぎり、その一切のものの研究は社会学に含

まれるのである。

既に述べたとおり、社会学者が関心をもつのは、結合関係にある人間間の関係や、この関係が現われる人間の集団^{グループ}だけではなく、この人間関係や集団の創造と変形に寄与するすべてのことがらも含まれる。こうした影響因には、数多くのものがある。それぞれの住民には、生活をとるまわりの物理環境、風土・気候、動植物、人種・言語・宗教・慣習など社会的継承物、民族や地方の歴史の伝統などの影響がある。またこれらに劣らない影響力をもつものとして、過去および現代の共同社会^{コミュニティ}の経済機構がある。これらのすべてが一種の社会の大気^{アトモスフィア}を形づくっていると考えればよい。この社会の大気の中ですべての人が育ち、その重さを何ら自覚することなく生活し、移動する。かくしてこれらの時代の社会制度は存続する。別の比喩を用いるなら、それぞれの共同社会^{コミュニティ}の固有の文明あるいは「文化」^{カルチャー}（3）を形成するのに貢献しているこれらの影響因のすべてが、その共同社会の社会制度のすべてにとってのいわば鋳型となっているのである。それぞれの世代のすべての制度に影響を与えているこの社会的な鋳型も、それら制度から絶えず影響されている。この両者が創造し、維持する変転止むことなき環境に、諸個人は反作用し、反抗しさえするが、その影響からはついに誰一人も逃れ出ることはできないのである。

さまざまに集団をつくる人間たちの行動にはほとんど無数の重大な影響を及ぼすこの社会の大気の中には、次から次へ思想や感情の波が訪れる。それらは共同社会全体に拡がり、互いに干渉を増幅させながら、しだいに全世界に届いてゆく。このような波の著名な例は、仏教、キリスト教、イスラム教

などの壮大な世界宗教である。さらに別の例は、ギリシアやローマの栄光である。またそれより一千年も後の、ルネサンスや宗教改革の名で知られている精神の解放である。過去二世紀の科学的発見、とくに物理学や生物学における発見によってこの地上の隅々に届いた思想の流れも、以上とまったく同様の影響力を人間社会に及ぼしているが、社会学者は必ずしもこのことを知ってはいない。さらに重要なものは、その精神力や倫理的天性において、あるいはその思索や行動において、あるいはその文武において例外的な優秀さを示した人びとの生である。これがまったく予想されぬまま一つの社会を転覆し、他の社会を創造することすらありうる。ウィリアム・ジェームズ(3)は、このような人物を社会の酵母と呼んだ。その人は、たとえ自分でそれと知ることがなくとも、まったく測り知れぬほど大きな影響を同時代の社会に及ぼしうるのである。(「しかし」思想、情動、パーソナリティの力がどれほどの影響力をもつのかを考察することは、われわれのただ今の目的からは必要なことではない(4)。これらの影響因はいずれも、およそ単独ではなく、社会関係や社会関係が織りこまれた制度を創造し、変形する限りにおいてのみ、必然的に社会学の領域に入ってくるのである。

ハルフォード・マッキンダー卿(5)がロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの学長であったころ、大学での示唆にとんだ講義の一つで、われわれの住む地球を想像上分割して、諸科学の領域を明瞭に区分した。天文学者にとって地球とは、地上のものも地中のものもいっさい含めて真空中を回転する「扁平な球体」にすぎず、「天体」の一つであるのみであり、およそ天体のすべては、形、大きさ、「固有運動」、相互関係が研究されるべきなのである。他の科学者にとっての調査対象とは、地表ある

いは——われわれの研究手段の拡大に依じて——地中にあるもの、地上にあるもののすべてである。地球を一連の衣裳をまとったタマネギであると考えてみよう。固い表層（リトスフェア地殻）以外のものは考慮の外におくことにしよう。そうすれば地質学（地理学、岩石学、鉱物学、結晶学等を含む）の専門の主題が残るであろう。堅固な大地を無視し、地球を包んでいる水（ハイドロスフェア水界）に関心を集中してみよう。この水は、しばしば堅固な表層の深部にまで浸透し、また上方に向かっては空気と混り合っている。これこそ海洋学、水力学の主題である。が、いまひとつ地球を包んでいるものがある（アイオスフェア大気）。これに坎するわれわれの知識は着実に進歩している。大地や水と混合した大気は気象学の主題である。堅固な表皮およびそれを覆う二つの流体から想いをそらし、そこに住んでいる多数の生体（バイオス生物界）をもつばら注目してみよう。これは生物学の主題である。そして生物学を分類しようとすれば、細菌学、植物学、動物学ばかりではなく、心理学と呼ばれる第四の専門分科にも分れる。ハルフォー・マッキンダー卿がその目的のために必要としたよりもさらに二段階、この考え方を進めてみよう。新しい探究分野が開けるからである。地殻（リトスフェア）、水界（ハイドロスフェア）、大気（アイオスフェア）、生物界（バイオスフェア）をそれぞれ考慮の対象から除こう。そして、かつてエーテルと呼びならわしていた無限の媒体の中に熱光、磁気、電気、放射能などを誕生させる波ないしは振動や、その他それらの現象のとりあゆる形態のネットワークを考えてみよう。地球をとりまいてこの力の領域は、あまりにも非物質的であるため、アナロジーとしてですらタマネギの皮のようにには考えられないかもしれない。しかし、それは宇宙の他とは区別された一部分であり、物理学において研究される。さらに物理学の領域以上に非物質的な表皮がある。そ